

特集

生活を保育へ Vol.2 — 着替えるということ —

着替え

— 暮らしの中でのひんがし —

長田 瑞恵

私が初めて娘の服をこの手で着替えさせたのは、娘が生後五日目のことでした。産院は母子別室だったため、それまでは授乳以外の世話はスタッフがしてくださったからです。この日は退院に備えて沐浴実習があり、文字通り「生まれて初めて」母親自身の手で娘を着替えさせたのでした。

先生役の看護師さんの指示どおり、着せやすいようにあらかじめ肌着と上着の袖を重ねて通しておき、座布団ほどの大きさのクッションの上に置きましました。第一関門の沐浴を何とか終わらせ、用意して

おいた着替えの上に娘をタオルにくるんで寝かせました。そして、袖口から自分の手を差し込んで娘の小さな小さな手をそとつまみ、指を反対に折り曲げてしまわぬよう注意しながら、袖の中をゆつくりと引っ張りました。

「細い指や爪を袖に引っかけて怪我させてしまわないだろうか」「こんなに華奢な腕で折れてしまわないだろうか」「肩の関節が抜けてしまわないだろうか」「こんなに手間取っていたら体が冷えてしまわないだろうか」…。

やっとの思いで着替えが終わった時、冷や汗が出るくらいにどつと疲労感に襲われたものです。娘のほうも、きつと、「あし、くたびれた。看護師さんに着替えさせてもらうほうがずっと楽……」というところだったでしょう。

このように、着替え一つをとっても、第一子の娘との生活は初めてのことばかりで、戸惑うこともたくさんありました。「発達心理学が専門で、幼児教育学科に勤めています」と言うと、「子育ては心配いらないわね」というようなことを言われることがあります。しかし、認知発達理論の説明はできても、子育てで必要な事柄は全く別の次元の問題でした。頭の中の知識と、目の前の小さな赤ちゃんとの間のギャップは想像以上に大きいものだったのです。

娘が加わった新しい生活にも徐々に慣れてくる

と、毎日繰り返し返される着替えは、娘の成長を実感する時間の一つになりました。成長に合わせて服の形や素材も変わりましたし、着替えの時の娘の様子も大きく変わってきました。

新生児のころから首がすわってくるまでは、寝かせたままでも着替えやすい前開きの肌着ばかり着せていました。このころの娘はまだ活発に動くわけでもなく、仰向けに寝たまま、されるがままになっていました。ただ、裸にすると気持ちがいのか、そろえておいた肌着の上で尿や便をされ、慌ててまた着替えをそろえ直したことがたびたびありました。

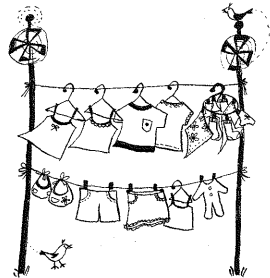
首がすわったあとは、頭からかぶる服や上下分かれた服を着せることも増えました。お座りができないころは親が娘をひざに抱いて支えながら着替えさせていましたが、娘が自力で床に座っていられるよ

うになると、遊んでいる娘をあやしなから、さつと着替えさせることができるようになりました。娘のほうもだんだんと手先が器用になり、好奇心も旺盛になって、服のひもを握ったり袖を口に入れたり、娘なりのお手伝いをするようになりました。また、お風呂が大好きな娘は、服を脱がされるとお風呂の時間になったことがわかるようで、はしゃぎ始めるのでした。

ところが、八か月を過ぎたころから、着替えの最中に泣きながら、のけぞって抵抗することが増えました。着替え全般が嫌というわけではなさそうで、どうも頭からかぶるタイプの服が苦手なようです。最初のうちは、「お手々、貸してねー」などとなだめながら、少し強引に手早く着替えをすませてしましました。しかし、目を追うごとに娘の抵抗は激しさを増していきます。「これも自己主張の一つ、成

長の証」とほほ笑ましく思いながらも、朝の忙しい時などは、毎度毎度、大の字になって私のひざの上から滑り降りていかれるのも少々困りものです。

そこで、娘の好きな「いないいないばあ」遊びのように、「ほーら、いないいない、ばあ！」とかけ声に合わせて首を通すと、機嫌よく着替えられることがわかりました。ただし、この方法が通用するのは娘が眠くない時だけで、最近では夢中で遊んでいる最中に機嫌を損ねずに着替えさせるのにも工夫が必要になってきました。この分ですと、無理せず着替えるための別の「奥の手」を考えなければならなくなる日も近そうです。



娘はまだ言葉では気持ちを表現してくれません。満面の笑みを浮かべけらけらと声を立てるときも、真っ赤な顔をして泣きじゃくるときも、その様子から娘の気持ちを推し量り、前後の文脈から理由を探り当てるしかありません。この一種の謎解きを毎日繰り返しながら、私と娘はお互いを探り合い、少しずつ理解を積み重ねてきました。それは、まだ娘自身にもよくわからない娘の気持ちを代弁しながら、娘の中にある、もやもやとした心の原形のようなものに光を当て、次第に形あるはつきりした心へと育てていく過程であるように思います。そして、その繰り返しを通して、私にとっての娘はもちろん、娘にとっての私も、ほかの誰とも替えられない存在であるような関係へと育ってきたように思います。

さて、娘の着替えを選ぶのは私の楽しみでもあり

ますが、その日の天候や娘の発達に合わせた服を適切に選ぶのはなかなか難しいものです。

初めて頭からかぶるタイプの服を着せたのは、生後八週目のことでした。当時、娘はまだ首がすわっていませんでした。実は、誕生祝いに頂いた中からかぶる服があり、一度も着せずに着られなくなるのも申し訳なく思い、少し無理をしてお出かけの日に初挑戦したのでした。

ところが、このことが思わぬ悲劇（喜劇？）を招いてしまったのです。

娘はチャイルドシートに座るとなぜか便意を催すことが多いのですが、この日も案の定、お出かけの車の中で一生懸命いきんでいました。車を止め、おむつを替えようと娘をチャイルドシートから抱き上げて、私は慌てました。肌着だけならともかく、上着もチャイルドシートも、大変な状態になっていた

のです。しかも、今日は初挑戦の頭からかぶる服。娘の首はまだ完全にはすわっていません。

「どうやったらこれ以上被害を拡大させずに、娘を着替えさせることができるのだろうか?」

夫にも協力してもらい、狭い車の中でやつとの思いで娘を裸にし、予備の普段着に娘を着替えさせました。娘はすっきりしたのか、すました顔で清潔な肌着におさまっています。私は、初披露で見ても無残な様子になってしまった可愛らしい洋服を複雑な思いで見つめながら、「これは大変な生活が始まってしまった」と改めて思ったのです。

娘との日々は、私の思いどおりには進まないことの連続です。しばしば、「やってしまった!」と思うようなことも起こります。しかし、どんなに慌てた経験も、あとになってみれば楽しい笑い話になります。そして、笑いながら少し反省します。という

のも、「やってしまった」経験は、たいていは、私の気持ちや娘の状態より少しだけ先走ってしまったときに起こるからです。私は娘との生活を通して、相手に寄り添うということ、自分の意図や思惑はいったん保留にして、相手のペースを守りながら気負わずに待つということが、少しずつ実感としてわかってきたような気がしています。

毎晩、娘を寝かしつけたあと、洗濯を終えた娘の服を畳み、保育園に持って行く着替えを用意します。私はこの時間が大好きです。少し大げさに言えば、娘との暮らしを改めて実感できるひとときだからです。

妊娠初期から切迫流産のために入退院を繰り返していた私は、毎日祈るような気持ちで、まだ見ぬ我が子が着るはずの服をせっせと作り続けました。退

院の日に着るドレス、体を包むアフガン、体温調節のためのベスト、初めての冬用のカーディガン、まだ歩かぬ足に履く靴下…。完成した服は、どれも、これでちゃんと着られるのかと心配になるくらい小さく感じられました。新生児の平均身長は約50cm。

知識としては当然知っていましたし、職場にある実習用の赤ちゃん人形はもちろん、本物の(?)新生児を抱いた経験もあります。それなのに、我が子の大きさとして考えると、50cmとはなんと小さいことか…。

少しずつ大きくなるおなかをなでながら、できあがった何着もの服を取り出しては眺め、またきれいに畳んではしまい、おなかの中の娘に話しかけ続けました。「待ってるから、どうか無事に生まれてきてね」。

娘と一緒にいよいよ産院を退院する日、私が編ん

だニットのドレスに身を包んだ娘を見た時、涙が止まりませんでした。リスクの高い妊娠生活を送っていた私にとって、小さな服は生まれてくる子どもの生命を象徴するものだったのです。あまりの小ささに感嘆したドレスですが、その袖がなお余ってしまふほど小さな娘は、真つ赤な顔をして眠りながら、確かにそこに生活するものとして存在し始めたのでした。

妊娠中には娘の生命の象徴だった服は、今は娘の毎日の生活の一部として私の手の中にあります。新生児のころよりは二回りほど大きくなった服を一枚一枚丁寧に畳みながら、娘が私の元へ生まれてきてくれたことに感謝しつつ、明日はどうかやったら娘の抵抗に遭わずに楽しく娘を着替えさせることができるか、思案を巡らす毎日です。

(十文字学園女子大学)